ネットゲーだらけ！

俺だよ、俺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネットゲーだらけ！

【Nコード】

N9735M

【作者名】

俺だよ、俺

【あらすじ】

ほのぼの系ネットゲー小説 多分これだけだと何を言いたいのかわからないと思うのでとりあえず読んでみてください ネットゲーのモデルは特に無し レベル制でMMOとしか決まってもません、実在しないので探さないでね？ 暇つぶしにどうぞ 感想・アドバイスをくれたら嬉しいです

最初に

ネットゲーム

それは無限の夢と希望が詰ったゲーム

例え可愛い女キャラの中身は引きこもりの根暗な奴だとしてもそんな事は関係無く優しくしてしまう

少しでも時間が有ればインをしてレベル上げを開始してしまう

むしろ時間を作るために会社を辞めたり学校を休んだりする

運営の策略だと分かっているにもつい課金アイテムが欲しくなってきたらリアルマネーが消えている

朝起きたら最初にやることはPCの電源を入れてネットゲー起動させること

むしろ寝ない

俺が退出したら皆が死んじゃう！

そんなゲームがMMORPG

どう考えても毒にしかないけど、でもやっぱりやりたくなくなってしまふ

それはある種の中毒

でもそんなゲームが大好きだー！
さて、今日はどんな出会いが待っているのかな？

最初に（後書き）

読者の皆様、こんな適当な小説にごアクセスいただきまことにありがとうございます

さてこの小説はネットゲーが大好きな私がやってきた中で思った事や体験した事を書いていこうと思いますので共感する事やそりゃないわwということまで何かありましたら感想をお願いします

さらに中の人物になりきってのアンソロジーのようなものもあると思いますのでそちらもお楽しみください

さらにあるあるネタとキャラクターを随時募集しますのでどうぞよろしく

ありましたら感想に書いてください

作者は文章を書くのが苦手ですので駄文になることが多いと思いますがよろしくお願いします

キャラ設定(前書き)

読まなくても大丈夫です

キャラ設定

キャラクター

シエラ（女）

若葉マークの初心者

ネットゲー自体そこまでプレイしたことが無くタイピングも遅い
最初のエリアでうろつろつしていたところをマークに捕まり一緒にプ
レイする事に
どうしたら良いのか分からずにとりあえず戦士系にした

マーク（男）

中級者

セカンドキャラとしてスタートしたところ最初のエリアでうろちよ
ろしているシエラを発見、その場で保護をして回収する
このキャラは遊び用に作ったのだがシエラとあつた事によりファ
ストよりも使用頻度が高くなっている
メインからの持ち物移行はしていない
魔術師タイプ

ムーチョン（女）

中級者

ギルド：ムーの仲間達のギルドマスター
マークのリアル友人でネットゲー内でも良く絡んでくる
生産タイプ、服飾が大好きでイベントごとに配信される服をよく作
って配り歩く
女性キャラにトコトン優しい、「ネットゲーなんだからいいじゃねえ
か、画面のあの子がかわいけりゃ！」というのが信条

グレアム

上級者

ギルドに所属していない上級者

ゲーム無いでは知らない人がいないほどの実力を持っている

なんでも誰もする事の出来なかったボスモンスターのソロ討伐をやつてのけたらしい

だけど最近ではイン率が低下していてあまり見かけられていない
たまたま初心者エリアで遊んでいるところを見かけられたことがある
とか無いとか

おまけキャラ

ファイターくん(男)

接近戦が得意なチームの壁役

シスターちゃん(女)

回復が得意なクレリック

シーフくん(男)

盗むのが得意なシーフ

メイジ様(女)

ドSなメイジ

キャラ設定（後書き）

順次追加予定

初めての友達

ネットゲームを始める切欠ってなんだろう？

現実から逃げたいから？

友達に誘われたから？

イロイロあると思う

ここにいる今丁度始めようとしている少女はちょっとだけゲームが好きで、ネットサーフィンをしている時にたまたま見つけたパソコンゲームの広告が目止まった

元々興味があったし、広告の中に書いてある「完全無料」という言葉に惹かれたというのもある

この言葉の中には「課金をしなければ」という意味が含まれているのだがその事をこの少女は知っているはずもなかった

彼女は偶然商業系の学校に通っていたためにタイピングにはそれなりの自信がある

パソコン全盛のこの時代に感謝をしながら彼女はプロフィール欄を埋めていった、この先にまっているであろうファンタジーに胸を躍らせながら

「よし。これで良いんだよね？」

そう言った少女の前にはパソコンの画面の中でこちらを見ながら微笑んでいるキャラクターがいた

光り輝く門をくぐるとそこにあつたのはどこまでも広がる草原だった

初心者用フィールド

ここのフィールドは初心者が操作方法を覚えられるようにと設置されているフィールドだ

スキップできないためにプレイヤーから少々文句も出ているが運営はそれを無視していたりする

「え、えつと？」

そんなフィールドに珍しく本当の初心者がやってきた

セカンドキャラとかがほとんどの中、一人だけうるちよると危なかしく動き回っている

「あ、あれ？」

思い通りの方向に進まないのか時々戸惑いの声が聞こえてくる

このゲームでは音声でのチャット入力が可能になっており、マイクをオフにしないとその声が辺りに聞こえてしまうのだ

むろん彼女はそんな事は全く知らない

他のプレイヤー達はさっさとクリアしてしまおうと考えているのか彼女に目もくれずに着々とクエストをクリアしていく

そのことが逆に彼女を焦らせていく

しかし、ネットゲームと言うのは人対人、そうやって自分のことを

先にやっている人もいれば

「おい、どうかしたのか？」

ちよっとお節介なプレイヤーもいる

「やっとな終わったー！大体俺は何回入力ミスをすれば良いんだよ！」

ここにもう一人初心者サーバーに初心者と同等の時間をかけて辿り着いたプレイヤーがいる

名前はマーク、男でかけだしの初心者と同じ格好をしている

なぜ彼が初心者と同じ時間がかかったかというと、彼が最初のパスワードやID、メールアドレスを入力でミスを繰り返して、さらにサイトの読み込みに失敗したりということを幾度も繰り返したためである

「あつちやゝ。あいつ絶対怒ってるよなゝ、こつちからアイテムの受け渡しを頼んでおいて待ち合わせの時間から30分遅刻って……まあいいや、とりあえずTeerでもしてみても……ん？」

これからの計画を口に出しながら考えているとその視線の先にうるちよると危なっかしく動いているキャラクターを発見した
名前はシエラ、性別は女

「なんだネカマか？」

ネットゲームでの女性住人は少ない
それなのに女性キャラが乱造されているのは男性がネットゲーム内で女性キャラを作っているからだ
なのでマークはもし女性キャラに出会ったら中身は男と判断するようになっている

それが正しい判断なのかは知らないが、知り合いに男性キャラにおもいつきり媚を売っているネカマがいるのでそう考えても仕方が無いのかもしれない

しかもそれが上手いのか結構買ってもらっているのが凄い

さてそのような事は置いておいて、問題は今日の前にいるキャラクターである

それが演劇なのかどうなのか分からないがプレイに戸惑っている女性キャラクターがいる

そしてこのゲームのシステムに慣れていないのか会話が丸聞こえ「あれ」とか「えつ」とかがチャットに表示されている

はっきり言えば鬱陶しい

ログが流れていくためこういった行為はマナー違反だ

「しょうがない」

いつまでも放置していたらそのうちに自称・中級者又は上級者の痛い人たちに文句を言われること間違い無しだ（ここで重要なのは注意や指摘などではなくて文句というところ）、別に自分とは関係の無いプレイヤーなので無視しても良いのだが、なんとなくそれはしたくなくった

しょうがないのでマークは近付いていき

「おい、どうかしたのか？」

と聞いてみるのだった

「え？」

話しかけてきたキャラクターを見てみるとそのキャラの上にはマークと表示されていた

男性キャラクターで赤い髪をした少年だった

「いや、さっきからアウアウ言ってたみたいだからどうかしたのか」と

ポリポリと頬をかくマーク

このゲームをやりたいと思った理由の一つに多彩なエモーションがある、様々な感情を表現するために運営が用意したモーシヨンの数はなんと100種類！

そんなに用意する気力があるならもつと別のところに使え、と某ゲーム雑誌に呆れられた事もあるほどだ

「で？どうかしたのか？」

「あ、あの。こういうゲームが初めてで、ちょっと戸惑ってしまいましたって」

モーションはまだ使えない
というかそれだけの余裕がまだ彼女には存在していなかった

「ふーん。……ネットゲー初めて？」

「はい」

「そっかとりあえず友達登録よろしく」

「へ？」

そう言うとマークが手を差し出してくる
すると画面に「マークからフレンド希望が来ています、許可します
か？」と表示された

シエラは慌てながらもすぐに了承をする

「んでフレンド同士の会話の仕方は……」

マークの説明を聞きながらシエラは少しずつネットゲーのやり方に慣
れていった

「とりあえずこんな感じかな」

「は、はい。あ、ありがとついでにいます」

「あはは、なんというかお疲れ」

あまりに覚える事が多かったためにシエラは疲れてた
ネットゲーでのマナーや簡単なルール、禁止行動などもマークから教
えてもらっていたのだ
気がつけばもう出会ってから一時間が経過してる

「じゃあ最後に最後のクエストをクリアしようか、俺もクリアしな
きゃならないんだし」

「はい！」

彼らは適当に説明を交えながらも少しずつ最初のクエストを終わら
せていった

その中でドンドン他のプレイヤーは抜かしていったがその時にマー
クが「他のプレイヤーの速度なんて気にすんな、気にしてつと凡人
になる」と言われたのでそのくらいでは焦らないようになった
ノンビリクリアしていたのだが気がつけば今では最後の一個となっ
ている

「よし、じゃあクエストは受けたな？だったら最後のボス討伐行く
か！」

「はい！」

最後のクエストはボスの討伐、なんでも近くの洞窟にゴーレムが現
れたとかなんとか
こう言ったクエストの中身なんて気にしてないのだがシエラはじっ
くりと読んでいた
その為にマークに苦笑されたりもした

「一旦休むか」

「はい」

ボスの手前、そこまで辿り着くのにシエラとマークはかなりHPを削られてしまっていた

しょうがないのでボス手前で休憩する事になった

「マークさん」

「ん？」

ゆっくりと休んでいるとシエラは沈黙を破って話しかけてきた

「今日はありがとうございました、とつても助かりました」

「……ああ、気にするな。こういうのはお互い様だからな」

「それでもです。だってマークさんと会わなかったら多分このゲーム止めてましたもん」

正直な感想

ネットゲーというのは最初がきついものである

大体のゲームが最初何をして良いのかわからなかったり、上手く操作できなかつたり、友達がいないのでつまらなかつたりとそのゲームの良さを分らないで止めてしまう人も多い

「だから、ありがとうございます！」

シエラは教えてもらってどうにか使えるようになったモーションを

使ってマークに感謝した
おもいつきり笑顔で

「……さ、ボス戦行くぞ」

「はい！つてええ！？無視ですか！？」

「うっさい！さっさと行くぞ！」

「ま、待ってくださいよー！」

ネットゲーを何で続けるんですか？
そう問われたらこう答えるだろう

「新しい仲間に、友達に、会えるから！」

この日、また一人そんなゲームの魅力に魅了された少女が生まれた

初めての友達（後書き）

「ふう、終わった」

マークは誰もいなくなったフィールドで一人佇んでいた
あの少女に出会ってからもう一時間半である、その間にゲームの説
明とかマナーの説明とかずっとしていたのでリアルの指が痛い

「マイク欲しいな」

シエラが使っていた音声入力が本当に欲しくなった一日だった

「その前にこのアイテムを欲しがってくれないかしら？」

「げっ」

突然後ろから声が聞こえてくる

そこに表示されている名前は今とってもみたくない名前であった

「アイテムの移行にどれだけ時間をかけるのよあんたは！」

「どわっ！すまん！」

「ったく」

声の方向を見て見るとそこにいたのは長身の女性だった
そしてその上に見える「MASTER」の文字

「じゃあ、ちやつちやつと渡すわよ」

「あ、すまんいらぬ」

「へ？なんでよ、こんなに待ったのに」

「ちよつとき、初めからやってみたくなつた」

思い浮かべるのは先程出会つた少女

「たまにはこつこつのも良いかなってね！」

首都・ブレリアン

「おおー！ここが首都ですか！」

シエラが辺りを見渡すとどこもかしこもキャラクターがひしめいていて、そこら中に露天が開かれている

そしてチャットログを見ると「〇〇で安売り中！」だの、「今なら配送料無料でこのお値段！」だのとどんどんログが流れていく

「そ、ここがプレイヤー達の本拠地となる首都・ブレリアン。南が初心者用の草原、北が魔族の城方面で西は森、東が山ってなってる。まあ南以外に行くときは気をつけるって事だ、近場なら敵はまだ弱いが少しでも奥に行くとき絶対には勝てない。一般的に南から順に南西東北の順番で行くのが今のベターってなってる。そのうちに新しいマップが出てくるって言うからここもそのうち静かになるかもな」

バラバラと流れていくログの中で一生懸命にマークの書いた言葉を拾っているシエラ

無言になっているのに気がついてマークはフレンド会話だけを別のウィンドウで開く事を教えてやった

すると楽になったのか笑顔になったシエラをみてマークは少しだけ顔を背けた

「ここにいるとちょっと他のプレイヤーの迷惑になるだろうからちよつと離れようか、この先のエリアに酒場があったはずだからそこで落ち着いて話をしよう」

「はいー」

シエラの元気の良い返事を聞いてマークは歩き出す
少しだけその速度が速いのは彼のちょっととした心情からだろう

「あ、あれ？マークさん？」

しかし今回はそれが災いした、彼があまりにも早足で行ってしまったので人ごみに遮られたシエラはなんとそのまま迷子になってしまったのだ

シエラは近くにいる人と会話する方法は知っていたが遠くにいる人と話す方法を知らなかった
しかもここでマークが教えたマナーがダメ押しをする

（えつとこういう場所では一般会話はログが流れてしまうからダメなんだよね）

という感じである

話す相手を帰られるということを教わった時点でやり方を応用しろよと言えなくも無いが、彼女は結構アレなのだ
そう、アレなのだ。アホなのだ

マークはいまだに気がついていないが彼女はアホなのだ
学校でも「マイペース」だの「ノロい」だの「アホの子」などと友達から真面目な顔で言われるほどの鈍臭さなのだ
頭が悪いわけではないのだがアホなのだ、ついでにドジなのだ

そんな彼女なのでそのままマークを見失ってしまった

（ど、どうでしょう？）

こうなってくると最初と同じようにアウアウと辺りをうるちよろしてしまるのが彼女なのであった

今回はマイクを切る方法を教えてもらっているのでチャットには表示されないのがまだましなところだろう

しかし、そうやっているところにもいるのがふざける奴

A「お、そこに可愛い子発見 W W W W」

B「ちょ W W ネカマに反応するなし W W」

C「もしかしたら中身も可愛い子かもしれねえじゃん W W W」

D「ないな W W」

E「ねえよ W W W W W W」

という明らかに頭の悪い子達

こんなプレイヤーは今までにあったことが無いがきつといるに違いない。という作者の妄想から生まれた脇役 A E である

まあそんな会話が行われている事を全く知らないシエラは今なおアウアウと町の中をうるちよろしている
そして放置されている露天キャラを押ししまっていたりするのだが、そんなことには気が付いていないのかアウアウと動き回っている
するとそんな彼女に

A「どうかしたんですか？」

と話しかけた脇役 A が出てきた

「え？」

話しかけられたのでつい反応するシエラ

彼女の中では話しかけてくる人「マークさんみたいな良い人」という構図が勝手に出来上がっているのですぐに警戒を解いてしまう

A「いや、なんだか迷ってるみたいだったので」

そしてこの言葉、マークと同じような事をこのキャラクターは言うてきたのだ

こうなってくると頭のアレなシエラはコロッといつてしまうのである

「はい、酒場に向かっていたのですが知人に置いて行かれてしまつて」

「ああ、それは災難でしたね。とりあえずフレンド登録をしますか、周りの迷惑ですんで」

「はい！」

このようにあっさりフレンド登録をしてしまうのだった

ちなみにこの時に水面下（仲間同士のチャット）では

A「うはWWW初心者少女WWW」

B「ちょWWWまじで口説いてるWWW」

C「俺にも紹介しろしWWW」

A「フレ登録成功！まじ簡単wwww」

D「あとでばらされるなww」

E「実は俺、男です」wwwwA涙目wwww」

B「ありそいで怖いww」

A「俺の夢壊すなしww」

といった感じのやりとりがあったとかなかったとかそんなことは相変わらず知らないのでシエラはドンドン先に進んでしまう

A「ところで相棒システムってしてますか？」

「はい、知ってます」

相棒システムというのは男女のペアになることによりどちらかが敵を倒したらその経験点が両方に入るといふもの、もしインしていても経験点が入るのでとても便利な機能

しかも連携技なども存在していて、最後の方になってくると相棒の存在がかなり重要になってくるが大切なものなのだ
ただしそれ専用のクエストをクリアしなくてはならなかったり、解散するときにも手続きが必要などかなり面倒なのだ

なので普通であればこういった事は付き合いが長い人物と相棒になるのが一番なのだが、彼女はそんな事を考えていなかったりする、考えていても「なるとしたらマークさんが良いな」程度だ、それに「ただのゲームだし誰でも良いかな」とも考えていたりもする

そこらへんを闊歩している廃人とは考え方が根本から違うのだ
因みに水面下では

A「さすがに相棒システムは知ってたか…」

B「知らなかったら連れ込む予定だったのかよwww」

C「おまwwwひどwww」

と少しだけAが非難されてもいた

A「実は私相棒を探してしまして、それで良かったら相棒になって
いただけないかと思ひまして」

「ええ！？私ですか!？」

知っていたとしても初心者ならその重要性は分かっていないだろう
と思ったAは強攻策に打って出た
このまま押し切れれば(ゲームでは)美少女と相棒になれる!今まで
のように男の友人が作ったキャラとならなくてもいいんだ!とか考
えていた

「ええっと、私で良いんですか？」

A「もちろんです!」

内心ガッツポーズを決めたAだったのだがシエラが了承の言葉を書
く前に

「待てい！」

と誰かの声が響いた

誰だ？と思いいながらふきだしのほうを見てみるとそこには長身の美女が立っていた

「貴様……たしか女つたらしのAだったな！そこら中の初心者らしき人を見つけては声をかけてレアアイテムを持ち出して、「コレをあげるから相棒になってください」と土下座して回っていると云うあの！」

どうやらAはゲーム内ではかなりの有名な人物だったらしい
そしてその言葉を聞くと明らかに狼狽したように

「そ、そんな事はないですよ」

と言った

どうやら音声入力だったらしく声の震えがリアルに再現されている

「ふ、そんなホラを吹いても無駄さ！さあそこにいる美少女よ！私のところに来なさい！そうすればアイテムを差し上げるわ！あの服とかこの服とか！」

しかし、どうやらこちらの女性も同類のようだった

「な、あんだだって俺とやってることが代わらないじゃないか！」

「なんですってこの下種！私は別に対価なんて求めていないの、ただ……」

「女性キャラはたとえネカマだろうと構わない！彼女が画面の中で綺麗ならば！」

女性はシャウトした

リアルにシャウトした

何故か分からないが「女性キャラは」の部分だけ別にしてエリア全体に響くようにシャウトした

「こ、この台詞。間違いない……」

「ああ、奴だ」

「奴がこのエリアにいる……！」

ザワザワと露天広場から声が聞こえてきた

A「この台詞……まさか、貴女があのだ！」

「ふ、服を配り歩いて一年。まさかここまで有名になっているなんてね」

「あ、あの？」

完全に置いてけぼりになっているシエラ
しかしそんな彼女を完全に空気にするべく美女は動いた

「さあ、諦めて貴方はどこかに行きなさい。そしてその労力を世の
美少女キャラのためについやすのよ」

「イエス・マム！」

そしてAはそこから走り去っていくのだった

「さて、貴女これからどうするの？良かったら私のところに来ない
？良い服をたくさん用意しているわ」

その言葉にシエラはちょっと先程までの言動にひきながらもどうや
ら悪い人ではないようなので付いていこうとしたのだが

「おい！お前何やってるんだ！」

と再び発現する前に誰かによって遮られるのであった
しかしそれは今探している人物で

「ムー、あれほど他のキャラに迷惑をかけるなど言ったのに」

「あら失礼ね、これでもちゃんと人助けをしたのよ？」

どうだか、と肩を竦める

「シエラ、探したぞ」

どろぢぢぢぢぢぢの美女と知り合いのようだった

おまけの変な会話

1. ある日のファイターくん

ギルドチャットにて

ファイターくん(以下・フ)「なあメイジ様、今回の新ダンジョンが実施されたんだってさ」

メイジ様(以下・メ)「知ってる」

フ「だからさ今度行かね？」

メ「一人で行けば？」

フ「いや、ほらPTじゃないときついつて噂で」

メ「ふーん。友達いないの？」

フ「……」

メ「あ、凶星なんだ。まったくこれだから自分から話しかけれない人は……もう少し積極的になったら？そうしたらゲームも充実するんじゃないの？リアルより」

フレンドチャット

シスターちゃん（以下・シ）「あ、あはは」

フ「いやね、同じギルドなんだからさもつとP.Tプレイをね？」

シ「だったららこついつのはどうかな？」

フ「？」

・

・

・

ギルドチャット

フ「よう！メイジ様！」

メ「何？」

フ「例のダンジョンで超強力なマジックアイテムを落とすモンスターがいるんだって！こりゃもう狩りに行くしかないよね！」

メ「持つてる」

フ「……え？」

メ「さつきオークションで落とした」

フ「……」

メ「お金余ってたしね」

2・相棒システムの被害者

フレンドチャット

シスターちゃん（以下・シ）「あ、あはは」

フ「いやね、同じギルドなんだからさもつとP.Tプレイをね？」

シ「だったらこういふのはどうかな？」

フ「？」

シ「最近実装されたあのマップのモンスターがなんか強力なマジックアイテムを落とすらしいの、それを理由に誘ってみたら？」

フ「おお！ナイスアイデア！ちよつと言ってくる！」

シ「……」

シ「ふう、これでよしと。あとはノンビリ仕ビールの旅でも」

一般チャット

A「そのクレリックの人」

シ「はい？私ですか？」

A「そうそう、独り身なら俺と相棒にならないか？」

B「いや、そういうのは俺と」

C「いやいや、お前みたいなのはさっさとどっか行けよ。彼女は俺みたいな壁ファイターとが良いんだよ」

B「ちょ、回避シーフ舐めるなし。一撃も当たらずに倒せる事もあるんだぜ」

A「それは可能性の話でしょうが」

C「その点俺の壁は確実な固さを持っているからかなり便利だし、一撃死の恐怖なんてねえwwしかもHPがよく減るからクレリックとの相性も良い」

A「いやいや、そもそも俺が最初に話しかけたんだぞ」

以下永遠と話し合い

何故か人気のある回復系ジヨブの女子

シ「え、えっと？」（逃げても良いかな？）

酒と決闘は首都の花

首都のとあるエリアに存在する酒場

そこには酒を出すと言うシステムの他に様々な特別モーションを設置している事から誰でも一度は入った事のある場所である

しかもログが流れることを気にせず平気で一般チャットをするのが普通の場所で他人の会話が簡単に聞こえてくる、本当の酒場みたいなところなのだ

たまにヒソヒソと会話している奴もいたりとなんだか雰囲気も良かったりする

そんな酒場にシエラはいた

美女とマークの二人と共に一つのテーブルに腰掛けて話をしているまあ話題はもっぱらそこに座っている何も知らない初心者についてののだが

「それでマーク、この超絶美少女初心者は一体どこで見つけてきたのよ！こんな初心者なかなか見付からないわよ！？今では『振りをした』初心者つてのが一杯なんだから！」

美女の名前はムーチョン

彼女はその手に持ったジョッキをテーブルに何度も叩き付けながらマークを睨みつけていた

その目は酔っているのかなんだか焦点が合っていない、本当に無駄なところに労力を使いまくったゲームである

「お前リアルでも酒飲んでるのか？どうしてそんなに絡んで来るんだよ」

「うっさい！こんな美少女と知り合いでありながら親友の私に報せない奴なんて東京湾にコンクリの靴をはかせて沈めてやるうかしら！もしかして私に知られないうちに手籠めにするつもりだったのかしら？まあその気があっても、どうせ積極性の欠片も無い貴方ならこの子に手を出すなんてことは100年たってもありえないことでしょうけどね！」

「ああん！？てめえ喧嘩売るって言うんだったら利子つけてたたき返すぞ！？」

そこでなにやらメークが怒り出してテーブルに力強くジョッキをたたきつけ立ち上がる

「ああ、やれるものならたってみなさいな！例え生産系ジョブだとしてもこれほどのレベルの差が覆せるのかしらあ？」

因みにマークはレベル12対してムーチヨンのレベルは75である生産系のジョブを選択していても一応は戦闘系の能力値も上がっていくので低レベルでは相手にならないのだ

「やってみなきやわからねえだろうが！」

「じゃあその身の程って奴をその体に叩き込んであげ・る」

「キモイんだよネカマ！」

「あら！ネカマの何が悪いのよ！」

「決闘だ！」

ネカマを否定するような言葉をマークが使った事によってムーチョンもついに本気で怒り出した
そしてその発現を受けて周りでは「喧嘩だ喧嘩ー！」と騒ぎ出し、臨時的に賭けまで始まっていた
酒場では良くあることなのだが、ある時運営が何を思ったのか「だつたら賭けのできるシステムを作ろう」と言い出してなんと酒場のマスターに申請すれば賭けが成立するようになってしまったのだ！
本当に無駄なところに力を入れる運営である

しかしそんな喧騒の中、一人だけ事態を把握できていない人が一人
「ネカマってなんですか？」

シエラは一人だけ周りのテンションについていく事ができずにテーブルに座ったままそんな事をポツリと呟く
だがそんな一般チャットの言葉は周りの囁し立てる書き込みにより簡単に流されていくのだった

「おい、準備は良いかよネカマ野郎」

「こっちはいつでも準備万端よ童貞君？」

酒場の特設リングにて二人は相対していた
このリングは酒場のマスターに決闘が了承された場合にのみ現れるアイテムで中には二人だけが入る事が出来るようになっていて
観客は周りを囲むように立ち見をしている

お互いに相手のリアルの生活を良く知る友達なので話す言葉には容赦と言うものが存在していない

本当であればゲーム内で現実のことや下ネタを話すのは違反なのだが、この運営は「こういう場面なら仕方ないでしょ」とここだけ許可をしていたりする

それは運営としてどうなんだろうかと疑問に思うプレイヤーも多数存在するのだが、そんな馬鹿な運営が好きな奴が沢山いるのでそちらの意見は中々反映されていない

「ではこれより決闘を開始します！私、今回のレフェリーを務めますGMのフェイトです！」

ここでイキナリリングの上に登場したのはGM

俗に馬鹿な運営の筆頭と呼ばれる人物でよく酒場でうるちよろしているのだが、一般プレイヤーに隠れるようにして存在して雑談しているのも気が付かない。そして決闘が始まる時になるとこうしてGM用キャラで出てきてレフェリーを務めるのだ

好きな事はプレイヤーを楽しませる事とプレイヤーを悩ませる事
いっつも変な行事を思いついては新しいマップの配置を遅らせると言う困ったチャンである

ちなみにムーチョンと中が良いとかいう噂が流れていたりもする

「今回のルールはお互いに獲物あり防具ありでさきにHPを無くさせた方が勝ちということになります、ただムーチョンさんはハンデとしてHPが3分の1となりアイテムの使用を禁止、マークさんのみ使用を許可します。勝者に渡される商品は相手の持ち物の中から一つをランダムに手に入れることができます！それでは！」

GMが手を挙げるとそれまで騒いでいた観客達は一気に静まり返る

そしてその手が

「はじめ！」

という言葉と共に振り下ろされると画面いっぱいチャットが表示された

「はっはっはー！どうしたマーク、君の力はその程度かい？」

開始と同時にかけていったマークの攻撃をムーチョンは軽々とかわしていく

やはりレベルが違いすぎるのか一撃たりとも当たる気配が無い

そしてもう一つが経験の差であった、このゲームは攻撃の範囲判定がかなり厳しい

もし攻撃している最中でも敵が範囲外に逃げてしまつたらそれだけでもうアウトなのだ、それを駆使して戦われてしまつと高レベルの敵でも倒せてしまつ時があるほど

「ほれほれ、こんどはこっちから攻撃だ」

(っー)

一撃、たったそれだけでマークのHPが5分の1が持っていかれてしまった

(どじするっどじするー！?)

このままでは一撃たりとも当てられずに終わってしまう
相手はこちらよりも長くプレイをしていて腕はあちらが上、ついで
にレベルもあちらが上
元から勝てるとは思っていなかったがまさかコレほどまでに差があ
るとは思っていなかった

(せめて一撃だけでも)

一撃だけでも当てないとかつこがつかない
自分のことを頼ってくれている少女に対して

まあその少女は今、パソコンのタスクマネージャーを起動させて検
索しているためにこの勝負を見ていないのだが

(しょうがない、こうなったら少し勿体無いけど……アイテムを使
おう！)

アイテムは回復などの効果のあるものだけではなく、相手に状態異
常を与えるものがある

さらに魔法のカードと呼ばれるものもあり、その何は低レベルの呪
文が込められていたりするのだ

(まずは自分に対して補助を付ける)

最初にするのは戦士系スキルの一つの”マインドプラス”これによ
りこちらの物理攻撃の命中力が上がる、レベルが低いため効果時間
がかなり短く、さらに次までの硬直が長い^{ディレイ}ためあまり使う機にな
れなかったのだ

次に使うのは魔法カード

「呪縛のルーン！」

これを使う事によりリングの床に紋章が現れてそこからウネウネと触手が生えてきた

そしてその触手はムーチョンを雁字搦めにしてその場に押さえつけてしまう

これで相手はその場から動く事が出来なくなった

「食らえ！バツシュ！」

そして戦士系の特技の一つバツシュ、これは使う事によって威力を直接アップさせる事が出来るもので、これにより相手の防御力に関係なくダメージを底上げする事が出来る

そして振りかぶった剣をムーチョンに向かって振り終えるすマークムーチョンは笑顔でそれを受けようとする

そして結果は…

M I S S

「……………へ？あ、呪縛が解けた」

ついでに命中力アップも解けた
酒場は静まり返っていた

「うわー、あそこで外すか」

「たしか呪縛って回避の可能性をかなり下げましたよね？」

「あそこまで舞台を整えておいてあれはなー」

ヒソヒソと声が聞こえてくる

その噂の張本人はリングの中央で固まってしまっている

「えっと……えい、えい、えい、えい」

そうやって固まっているうちにムーチョンはマークに四撃与えてマークのHPをゼロにした

「マークさーん、元気になってくださいよー」

シエラが戻ってきて最初に見たものはテーブルについて頂垂れている恩人の姿だった

その隣ではムーチョンが苦笑している

「なんで？あれって高レベルモンスターに対する最善の組み合わせのコンボのはずなんだぞ？」

「ああ、運が無かったとしか言いようが無いね」

そしてマークはその日、リアルでもゲームでもずっと酒を飲んでいたのであった

酒と決闘は首都の花（後書き）

「ところでネカマってなんですか？」

「ん？リアルでは男だけど、ネット内では女性を演じている人のことよ」

マークは隣で永遠と酒を飲み続けているのでムーチョンが代わりに答えた

「そうなんですか？」

「そ、だから私はリアルでは男っていうこと」

「なるほど。じゃあ私は違うわけですね」

「「「「え？」「」「」

酒場の全員がシエラの方を向いたのだった

伝説は行く

伝説は行く

彼の名はグレアム、このゲームでは知らない人はいないほどのプレイヤー（廃人）である

いつでも最初にレベルキャップ（その時点での最高レベル、アップデートによつて最高レベルは上がっていく）に到達し、新ダンジョンを誰よりも早く踏破してwikiにあげている

そんな彼を一躍有名にしたのが魔族の城攻略である

そのダンジョンはPTでの攻略が普通となつているのだが、彼はその卓越した攻撃回避能力とモンスターの視界把握により敵の背後から忍び寄り時には一撃で倒し、時には無視して素通りするというこのMGSだと言いたくなるような事をMORPGでやってのけたのである

そしてさらにはボス戦においてはアイテムやスキルを効率的に使い、なんと一人でボスを倒してしまったのだ

その動画が某動画投稿サイトに投稿された時にその事実が発覚し、それを挑戦と受け取ったGM陣が魔族の城の難易度をさらに上げるといふ暴挙に出た
しかしそれをも難なくクリアした彼は「GMの敵」として有名になったのだ

そんな彼は今、初心者用のエリアでノンビリとくつろいでいた
彼が次に目的にした事、それは初心者を育てる事である

自分はもうGMに敵視（良い意味で）され、このままでは自分のせいでゲームの難易度が上がってしまう

その事で一番苦勞するのは他のプレイヤーであり、その中でもゲームに不慣れな初心者たちであると彼は考えたのだ

このままではこのゲームは過疎化が進んでしまう！

そう考えた彼はインするときには（レベルキャップに到達した後に）初心者エリアに入り浸り、永遠と指導をしたり説明をしたりして一日を過ごしているのである

「さて、今日のえも……生徒は誰にしようか」

彼にも好みはある

暑苦しい男にするくらいなら綺麗な女にした方が何百倍もましに決まっているからだ

草原の中、シエラはポップしてくるモンスターを待ちながら空を見上げていた

このエリアにいるのは今は自分ひとり、マークとムーチョンは今はまだオフラインと表示されている

「暇ですねー」

最近はずっとマークと一緒に狩りを楽しんでいたりムーチョンとチャットをしていたのでシエラはちょっと寂しくなっていた

「その君、ちょっといいかな？」

その時突然、後ろから話しかけられた
どうやら誰もいないと思い込んでいたのでマイクの出力を切り忘れていたらしい

「はい？」

この前イキナリ声を掛けられたときにちょっと危ない目にあっていたシエラは声の主から少し距離をとってそちらをみた
そこにいたのは黒い鎧を着たグレアムという一人の戦士だった
彼を知らない人物はこのゲームの世界にはいないと言ってもこのゲームを始めたばかりの彼女には彼が誰だか分からないが

「いや、どうやら暇しているらしいので私と一緒に狩りでもどうですかってね？」

「狩りですか？」

「ええ」

明らかに初心者装備ではない人にそう言われても怪しさしか生まれないのだが
高レベルの人がこんな初心者用エリアでレベル上げをするなんて聞いた事が無い

「えっと」

「ああ気にしないで下さい。私は最近、このゲームでやる事が無くなってしまうって、初心者の援護を主な活動にしているんです」

オンラインゲームでやることが無くなるほどやりこんでいるという事はただ一つ、シエラは最近ムーチョンによって教えられた知識から一つの単語を持ってきて

「ああ！ 廃人さんですね！」

と言った

グレアムは本体に500の精神ダメージを受けた

しかしそんな事でへこたれる彼ではない、彼は英雄なのだ、その程度の精神攻撃で屈するようでは魔族の城を誰にも気が付かれずに切り抜けることなど出来るはずが無い

「ははは、そうとも言われる事があるね」

現実でもゲーム内でも

「ただ、そこまでこのゲームだけにのめり込んでいるわけではないよ？」

他にも18禁ゲームやアニメにもめり込んでいるからである

「ちゃんと働いているからね」

マビノギで

「あ、そうなんですかー」

「そうそう。ただちょっと他の人よりもゲームが好きで寝る時間を惜しんでるっただけだよ」

これがゲームの英雄の実態である
現実の英雄も寝る時間を惜んでいたようだが何故こうまでも違う
のだろうか

「じゃああれですね？引きこもりでもないんですね！」

純粋な言葉により英雄は本体の精神に999のダメージを受けた（
カンスト）

しかしそんな事でへこたれる彼ではない、彼は英雄なのだ

「あ、あはは。ところで狩りをしないかい？」

「あ！すみません！友達が来たのでそっちに行きます！ではでは」

たったたつと走っていくシエラ

それを見送る英雄ゲーム

彼は今日、久々の惨敗と言うものを味わった

しかし彼はこの程度ではへこたれない！彼は英雄なのだから！

「今日は、もう寝るか」

と考えていると目の前にフレンド希望のウィンドウが開いた
そこに書いてあった名前はシエラ

彼は進む英雄だから！

彼は今日、一つ大きなものを手に入れた気がした

伝説は行く(後書き)

「あーマークさん！」

「よう、初心者エリアでレベル上げてたんだろ？どうだった？」

「一人で暇でしたがなんか途中から面白い人が出てきて話してました！」

「へー、そりゃよかったな」

「はい！」

おまけの妙な話

3・シーフくん危機一髪！

シーフくん（以下・シ）「ふふふん、今日は新しいダンジョンが発表されるんだよね！しかもなんだか僕ちゃん大活躍のよ・か・ん！」

インフォメーション「今回のアップデートで新しいダンジョンが開通しました、このダンジョンはトラップが沢山設置されております、お越しの際にはシーフの準備をお忘れなく」

シ「ふっふっふ、これでただの壁といわれることもなくなったということだー！さあ皆！僕をダンジョンに誘えー！」

ギルドチャット

ファイターくん「すまん、フレンドと行く約束があつて」

シスターちゃん「ごめんなさい野良パーティーに捕まつて」

メイジ様「一人で行けば？」

シ「……」

終了

シ「良いんだ良いんだ！どうせ僕なんて一人でクリアできるから良いんだ！ファイターなんてただの肉壁だし！メイジなんて軟いだけの火力馬鹿だし！シスターなんて名前の頭文字が被ってるし！僕は一人で入って英雄みたいに一人でクリアしちゃうもんね！」

モ「ギシヤアアアアア！」

シ「お！魔物だ！とおう！」

ザシユ！

クリティカル

モ「グワアアアア！」

シ「へへ〜んだどんなもんだい！」

モA Z「〜ぎしやあああああああ！」

シ「あ、あれ？モンスターが多いよー！？トラップメインのダンジョンじゃないのー！？」

別にモンスターが少ないとは言っていない

シ「うわ！なんとという屁理屈！つと、とりあえずトレインは不味いから……くそ、救援を要請してこの回避力にかけてみるか！どりゃあああ！」

M I S S

クリティカル

M I S S

M I S S

M I S S

シーフにヒット

シーフにヒット

クリティカル

M I S S

シーフにヒット

M I S S

M I S S

シ「く、くそう。たまに当たっちゃう!どうするか…」

フ「おい!大丈夫か!?

シスター「助けに来たよ!」

シ「え?なんで?」

フ「いや、救援だしてたじゃん。それがたまたまこっちまで来たんだよ」

シスター「はい。こっちにも届きました」

シ「そ、そうなんだ。助かったー」

ちよつと離れた場所

メ「……………」

シ「ふう、助かったよ二人とも」

フ「いやいや、じゃあこれからどうだ？」

シ「へ？」

シスター「私のPTとファイターくんのPTはさっき解散したんです、だから一緒にと思いません」

シ「ありがとー！やっぱり持つべきものは友達だね！」

ちよつと離れた場所

メ「……………」

私とイノシシとクエストと

ある日シエラはいつものように初心者用のエリアである首都の南に来ていた

目的はもちろんレベル上げ

ゲーム自体は前からやっていた事があるので簡単に操作方法にはなれてきていた

そのめために今は戦闘について勉強しているのである

ゲームは今までやってきていたので基本的な目的や行動はなんとなくでも想像出来るのだが、いまだにマウスでの視点変更や、キーボードでの移動やアイテム使用がどうしても遅れてしまう

この間の戦闘で自棄酒を飲んでいたマークからイロイロと教えられたのでそれを練習しているのだ

そしてそんな感じで練習をしていると段々と余裕が出てくる

なのでもう少し奥の方に行ってみるかと考えちよつと奥に存在していた丘に向かっていった

「おお、ちょうど夕日ですね」

時間的に朝と夜が変わる時間帯、遠くの空を見みると日が沈んで行くところだった

見ているだけでも良いのだが目的を忘れてはいけない、なので丘の下を見て次の獲物を探してみたところ

なんだか一人の冒険者が魔物に追われていた

「あ、ああいうのは助けた方が良いんですかね？」

と悩んでいると

チャット欄に「ハイヤーが助けを求めている」と表示された、そしてそのハイヤーだと思われる人物はこちらに向かって猛ダツシユで近付いてくる

「あ、こっちに向かってくる!？」

剣を構えて魔物を迎え撃とうとしてます

ハイヤーが通り過ぎたのを見送り、その魔物を……

ブモオオオオオ!

魔物に吹き飛ばされました

削られるHP、そして止まったのは良いけど今度はシエラに目標を変更したらしく、鼻息を荒くして見てくる一匹のイノシシ。そして表示されているレベルは23、対してシエラ18

「む、無理ー!？」

ドンッ

そして画面に浮かんだのはGAMEOVERの文字だった

画面が元に戻ったとき、シエラがいたのは首都の一角で、南の門の前だった

目の前にはセーブポイントの宝石がキラキラと光っていた

「あちゃーしんじやいましたか？」

そしてポイントに存在しているNPCがいつものように決まりの台詞を言ってくる

それを聞いているとすぐ隣に同じように死んだと思われる少女が出てきた、その名前はハイヤー、先程あのイノシシに追われていた人物である

「はあ、クエスト失敗だよ」

その少女はそう言って頂垂れていた

こんなに近くでそんな事をされて黙っている事のできるシエラではない

いつかはマークと同じように困っている人を見かけたら助けをあげたいと日々考えているのだ

「どうかしたんですか？」

「へ？」

少女はシエラの言葉に反応してシエラの顔を見た

そして目を大きく見開いて

「すみませんでしたー！」

とジャンピング土下座をしたのだった

「え？え！？ええ！？」

それを見ると、助けようとしたはずなのに想いつきり誤られてしまったシエラはどうしたら良いのか分からなくなり、アウアウとあたりを見渡すのだが周りには決められた台詞しか言えないNPCと何も話す事の無いセーブポイントの二つしかなかった

「いや、救援要請を聞きつけて来てくれた方かと思っつてしまいおもいつきり撥ねてしまいました！申し訳ありません！」

「は、撥ねる？撥ねるってなんですか？」

「うわ！しかも初心者の方でしたか！？うわゝ本当にすみません！」

「いえいえいえいえいえ！大丈夫ですから！ただのゲームですから！」

「あ、そうですか？」

すぐに立ち直りそのままシエラ肩を抱いてくる

「いやークエストでさゝ、あのイノシシの牙が必要なのよゝだけどあいつのレベル23じゃん？私じゃ絶対に勝てないのよゝ。でもこの時間帯だと知り合いがほとんどいないわけ、こりやどうしたもんかと思っつてさゝしょうがないから野良PTを募つてたのよゝ、そしてたら誰もこないからさ、しょうがないから一人だけでいったんんよゝ。そしたらあの様っつてわけ」

そこで一旦言葉を止めてシエラにも分かるようにため息を吐くそしてそこでシエラを見て

「だからさあ、こんど何か武器でも防具でも作っつてあげるからさ、

あのイノシシ倒すの手伝って頂戴よ」

「えっと、良いですよ?」

「本当!? いや、助かるわー!」

「でも私一人だと危ないかと思うのですが?」

「じゃあさっそくイノシシのいる場所に向かっていこうか! あっはっはー!」

「あ、あの?」

どうやら話し始めると人の話を聴くことも無くドンドン進んでいってしまつらしくこちらの言葉に全く返事をする事も無くシエラを引きずって行ってしまった

「さあここよ! ここにあのつくきイノシシが現れるのよ!」

「は、はあ」

そこは初心者用エリアの奥にある森の中

ここは20レベル前後の敵が出てくるのでまだシエラは入った事が無かった、まあ今日マークと一緒に入る約束をしていたのだが

「さて、ポップするところはこのちよつと先よ。そこまではモンス

ターが出ないから警戒しなくても大丈夫！ただしそこに着くまでに自分の強化を忘れずにね？」

「は、はい」

「あ、ちょっとストップ！」

「はい！」

先を覗いてみるとそこには先程見かけたのと同じモンスターがいた
一体だけのようでこれなら周りから襲われる心配が無い

「ラッキー！また一体でいるところを見つけられたわ！」

「さっきも一体だったんですか？」

「ええ、だから挑んでみたんだけどダメだったわ」

「なるほど」

そこで戦闘の準備を始める二人

HPやMPは全く減っていない、二人はお互いに持っている補助スキルをかけた

「えっと、HP自然回復速度アップにMP自然回復速度アップ」

「攻撃力アップ（小）と防御アップ（小）です」

「うん、これくらいで良いよね。作戦は私がポジションを使って回復して貴女がアイツを引き付けながら技を使ってHPを削る、私は

弓も撃つけど威力は低いからそこまで期待しないでね？」

「はい！私はとりあえず殴ります！」

「それでよし！ではGO！」

そしてイノシシとの戦闘が始まった

シエラの攻撃、しかしそこまで削る事ができない

そしてイノシシの攻撃はこちらのHPを軽々と削ってくる

(これはかなりきついですね)

相手はNPCのAIなのでこちらの攻撃を意図的に回避してくると
いう事は無い、しかしレベル差によってステータス的に回避されや
すいのだ

後ろからの援護によって少しずつ相手のHPは減らされていくがこ
ちらのHPはそれ以上の速度で減っていく

後ろからのポーションによって回復はしているがそれでもディレイ
という硬直時間のお陰で段々と削られていく速度が上がっていく

(これが自分より高いレベルのモンスターとの戦いですか！)

「シエラちゃん！このままだとジリ貧だ！しかもここまでの様子だ
とこっちが多分負ける！撤退しよう！」

(それしか、無いのかな?)

初めて追い込まれたモンスターとの一対一での危機的状況
シエラは撤退しよう相手からターゲットを切るうとした

その時に彼の声がちょっとだけ蘇った

あれって高レベルモンスターに対する最善の組み合わせのコンボだぞ?

そう、彼がムーチョンとの戦ったときに使っていたコンボが存在してた

そのコンボの内容はムーチョンから教えられて今でも覚えている
そしてその技をお金を払って覚えていたはずだったショートカット
(技やアイテムをキーボードの数字に当てはめておく事でワンボタ
ンでそれを使用できるようにするもの)には入れてなかったが

「まずはマインドアップ」

画面の名前の横に表示される補助の表示

「次に呪縛のルーン」

アイテム欄からそのアイテムを選んでしようする
するといつかのムーチョンのようにイノシシが触手によって捕らえ
られた

「そして相手の頭に向かって!バッシュ!」

クリティカルヒット!!

神は彼女に味方した、彼女がその剣をモンスターに振り下ろすとモンスターの頭の上に黄色い文字で”クリティカルヒット!!”と表示される

そして敵のHPは一気に減り、そのまま地面に倒れ伏すのだった

「いやー助かったよー」

頭に手をやって頭をかきながらハイヤーは朗らかに笑った

「まさか倒しちゃうとはね！これでクエストが進められるよ！ありがとう！」

「いえいえ、なんとかなつて良かったです！」

「じゃ！今度武器か防具を持っていくからさ！その時は受け取ってくれよ？もつと生産が上手くできるようにしておくからさ！」

「楽しみにしてますね」

「へへ、じゃあねー」

そう言ってハイヤーは去っていった

それを見ているとなんだか幸せな気持ちになってくる、自分もマーカーのように誰かの助けになれた事に喜びを感じながら彼女は草原に行こうと踵を返した

「で？何があったんだ？」

「あつ！？マークさん！」

振り返ったところに丁度良くいたのは笑顔を浮かべたマークだった
今まで考えていた事が事なのでなんとなく彼を見るのが恥ずかしい

「な、なんでもないです！」

「そうかい、じゃあ森に行ってみるか！ついでにイノシシでも狩ろ
うぜーアイツの牙は結構需要があるからな」

「ええ」

「ん？どうかしたのか？」

「……いえ、なんでも」

またアレと戦つのかと思うとシエラは少しだけ嫌な気分になった

私とイノシシとクエストと（後書き）

森にて

「あ、おいシエラそっちじゃないぞ？こっちだ」

「え？」

「そっちにはこの森のボスがいるから気をつけるよ？こっちにも牙を落とすちっこいイノシシがいるからな」

「ええ！？」

後日聞いたことによると、某GMが「プレイヤーが怖がるように入り口近くにボス配置しようぜ！」と言ったためにこのようになっらしい

この日初めてGMでレフェリーを務めたあの人をシエラはうらんだ

初心者大歓迎キャンペーン 序章

諸君、私はゲームが好きだ

諸君、私はネットゲームが好きだ

諸君！私はオンラインゲームが大好きだ！

ラグナロクが好きだ　ロハンが好きだ　M O Eが好きだ　グランドファンタジアが好きだ　マビノギが好きだ　メイプルストーリーが好きだ　テイルズウィーバーが好きだ　ベルアイルが好きだ　リネージュが好きだ

ファンタジーで　学園で　歴史で　戦国で　三国志で　西洋で　東洋で　武俠で　SFで　ミリタリーで　ロボットで　海洋で

この世界に存在するありとあらゆるオンラインゲームが大好きだ！

誰とも分からない回復役の少女に回復してもらうのが好きだ
回復してくれたその子と少しでも良い関係になろうプレゼント作戦
を実行した際に「ありがとう」などと言われたら心が躍る

だれよりも先にメンテナンスが終わった瞬間に入るのが好きだ
まだ誰もいなかったことの無いダンジョンに入り、最初に最深部に到達
した瞬かは胸がすくような気持ちだった

チート行為をしている奴をさらすのが好きだ

運営にそのことを報告してそのアカウントをBANした時など感動
すら覚える

PKするつもりで近付いてきた奴を逆にPKKしてやったときなどもうたまらない！

懇願して助けを求めてきた奴を私が振り下ろした人差し指と共に振り上げた剣がPCを切り裂くのも最高だ！

自分勝手な運営に振り回されるのが好きだ

いつまでたっても実装されることの無いメイド服に夢みてせっかくスキルを上げていたのに中々実装されず、諦めて次のゲームに手を出した瞬間に実装されたのはとてもとても悲しいものだ

諸君、私はオンラインゲームを 誰もが廃人になれるようなゲームを求めている！

諸君、このゲームに集いし同志諸君

君達はいったい何を望んでいる？

さらなるゲームを望むか？

情け容赦の無い廃人ゲームを望むか！？

(ネットゲー！ ネットゲー！ ネットゲー！)

よろしい、ならばオンラインゲームだ

我らは僅かに1万と数千のプレイヤー、FFユーザーの10分の1にも満たない弱小ゲームにすぎない

だが諸君らは他のネットゲー廃人にも負けなかつわものだと私は信仰している

ならば我らは！FFユーザーにも匹敵する集団となる！

我々を負け組みと笑っ、自分こそが勝ち組と思っている奴らを叩

き起こそう

髪の毛をつかんで引きずり降ろし眼を開けさせ思い出させよう
連中に本来のネットゲーを思い出させてやる
連中に負け組みとののしられる気持ちを分かせてやる

天と地のはざまには 奴らの哲学では思いもよらない事があることを
思い出させてやる

行くぞ諸君

「初心者大歓迎キャンペーン発動！」

「え、えつとなんだか凄いですね？」

そう言ったシエラの目の前には何百人と言うキャラクターがひしめ
き合って中央にいる一人のGMを見ていた

「ここまでやるか普通？」

その横で呆れながらもちよっとワクワクしている一人の青年、マ
イクが呆れたようにGMを見ていた

「さっすがフェイトさん！やる事が違うわね！」

そのまた横では前の付帯とは違い喜びをモロに表現してピヨピヨ

ンと跳ねていた
こうなってしまったのには訳がある

いつものようにゲーム内で楽しんでいると、インフォメーションで「首都中央広場にて○時○分重大発表あり、至急前プレイヤー集まれたし」とサーバー全体に流れ出したのだ

そこで暇だったプレイヤー達が一つのエリアに入り込みワイワイガヤガヤと騒いでいると急に暗くなり、そして特定のボス戦の時にのみ入る映像が流れ始めて気が着けば中央広場の真ん中によく酒場で使われているリングが現れてフェイトが先程の言葉を言ったのだ

「最初から連絡事項の中に書いておけば良いじゃん、どうしてこんな事をしたんだ？」

「そこがフェイトさんクオリティよ！ああ、彼がいるからこのゲームは繁栄しているのよね！」

「むしろアレのせいで変な奴だけがこのゲームに残っている気がする」

「もう一度決闘する？」

「いえ、遠慮します」

前回の決闘以来、マークは絶対に決闘をしなくなった
やはり前のあの事が軽いトラウマになっているのだろう

「初心者大歓迎キャンペーンって結局何をされるのか言われていない
気がするのですが？」

「「あ」「

しかし周りのテンションに流されてファイトはもうその場からかく良く退場してしまっているので説明する人がいない、このゲームのプレイヤーはとりあえず盛り上がれば良いのかそのことについては誰も触れる事はしなかったのだ

「きっと公式ページには書いてあるのよ、多分だけど」

「だと良いな、あの人の事だから何も考えずにメンテナンス開始直前くらいに言っただけのまま周りの人に放り投げたって可能性もあるだろうけど」

「それは否定出来ないわね」

そんな風に話し合っている二人はなんだかあのGMの事を良く知っているように見えた

「お二方はあのGMと知り合いなんですか？」

「ん？ああー知り合いと言うか何と言うか」

「リアルでの友人……なのかな？」

友人のところに”？”がつくのはなんだか可愛そうな気がしてくるのだがシエラは苦笑するだけに留めた
そして二人がなんだか遠い目をしているところを見るとちょっと触れてはいけない事だったので、と思えてくる

「ま、まあ腐れ縁ってことで！」

「そうだな！中は悪くないし！」

どちらこの話題はここで終了のようだ

しかし、そこで言葉を濁されると少しだけ気になるシエラであった

初心者大歓迎キャンペーン 序章（後書き）

ところで知ってましたか？

このサイトって「最強」や「チート」と書いておくだけで閲覧数やお気に入りかなり凄い事になるんですよ？

あと有名な原作があればなおよし

初心者大歓迎キャンペーン 中章

初心者大歓迎キャンペーン

- 1．初心者を見つける
- 2．初心者に話しかける
- 3．フレンドになる
- 4．やっふーい!!!!!!

「だそうです」

とりあえず暇だったシエラが公式ホームページを確認したところ以上の文章が書かれていただけであった

「なあーついいか?」

「何かしらマーク」

「アイツ景品が思いつかなかつたのかな、それとも盛り上がれるだけで十分だと判断したのかな?」

「そうね、コレだけで初心者が釣れるなんて普通の運営なら考えないわよね」

経験点UPだとか特別アイテムプレゼントだとかがあつてならまだ分かるのだがこの説明にはそのような文は一切書かれていない
これではゲーム内の人たちだけが盛り上がるだけになってしまう

さすがにここまで来ると判断に困るのかムーチョンも苦笑しているだけだ

「ま、まあ何も考えていないわけが無いでしょうし、もしかしたらここに書いていないだけでプレゼントだってあるんでしょきつと」

「まあそうだな、とりあえず俺達みたいな初心者とか生産系にはあまり関係の無いイベントだからノンビリしておくか」

「ええ」

「そうですね。でも生産系は関係無いんですか？そっちのジョブを目指してくる人もいますよね？」

「ああ、そりゃいるだろうけど結構難しいんだよ」

「生産系って言うのはレベルが低いうちは売れる商品が作れない、ということはお金の調達が凄く難しいの」

「え？でも低レベルの装備ってありますよね？」

「そうね、でも高レベルの人が作ったものだと高品質ってのになるの。しかもそういう高レベルの人って低レベルの駆け出しのために値段を安めに設定していたりしていて、中々初期の作った装備は売れないのよ。材料だってタダじゃない、お金が手にはいらないければ自分で採るしかない、だけど生産系は弱い。ね？初めての人には生産系は向かないの、メインのキャラがいてそれがお金を稼いだり素材を持ってきたりしてやっとできる物なのよ」

「へーそうなんですかー」

「さっすがサーバー最高品質を誇る生産系ギルド『m u - 』のマス

「ターってだけはあるよな」

「ふふん」

「ええ！？そんなんですか！？いつつもそこで買い物してるんですよ」

「へーそうなの？でもそれは私の担当じゃないわね。私の主な生産物は服飾だから」

ちなみにゲームに存在している生産系ジョブは

服やネックレス、指輪などを作る「服飾」

鎧や剣などを作る「鍛造」

魔法のカードやポーションなどのアイテムをつくる「調合師」

ギルド用のアジトと呼ばれる建物やその家具を作る「大工」

の四つが存在している

服飾と言うのは戦闘用ではなく、主に見た目に影響するために値段が安く冒険にも影響しないために儲けが少なく、実際にムーチョンほどまで極める人は少ない

「服飾って言うのは他の鍛造や調合師のように冒険には関係しない、だから陰に隠れることが多いのだけれどオンラインゲームっていうのは人対人、ようするにリアルと変わらないのよ。だったらオシャレしたいっていうのも一つの意見でしょ？」

自分の得意分野のことを説明する事ができて嬉しいのか、ノリノリで説明していくムーチョン

最後にはおまけにウインクまでかましていった

「おおー凄いんですね！」

「ふふふ、もつと褒めてシエルちゃん！この私をもつと褒めて頂戴！」

「はい！凄いです！完璧です！最高です！」

「あぁん！もうテレビアーン！！！」

「…誰がこの天然と馬鹿のセットをどうにかしてくれ」

マークはここで初めて、シエラのプレイヤーが天然である事を悟ったのだった

そんな事は猛過去の事として置いておいて、今回のイベントにはムーチョンは以上の理由から不参加、マークは「もうシエラがいるし」ということになり三人は初心者用のエリアに来る事にした

「なんでお前も来たんだ？」

「え？今日はギルメンが皆戦闘キャラでイベントに参加しているから私は暇なのよ、だからどんな感じな事になるのかと思って見学に

来たの」

「そうかい、まあ生産系とはいえ高レベルだから放っておく事にして、今日も奥の森に行きましょうか」

「はい！」

「おー！」

「ちょっと良いですか？」

「「「え？」「」」

出鼻を挫かれた事で少し前のめりになりながらも声のした方向を見ていると、そこにいたのは一人の初心者マークを付けた男性キャラクターだった。装備からみて、接近戦タイプのキャラクターである。その男はオロオロとしながらこちらに話しかけている

「えっと、こんなものがアイテムBOXの中に入っていたんですけど……」

と彼はチャット欄にアイテムを貼り付けてこちらに見えるようにしてきた

「え〜つとなになに？コレを近くにいた格上と思われる人に渡しなさい、そうすればその人からイロイロなアドバイスを受けられるでしょう？」

ちなみに説明台詞ではない、タダ単にシエラがマイク入力を切り忘れていただけである

「格上って言っても俺達そこまでレベル高く無いぞ？むしろ低レベルのような気が……」

「でもその方の名前のところに >MASTER< って書いてありますよ？」

「」「あ」「」

ギルドに所属しているものには名前の上に所属ギルドの略称が見える、しかもマスターの場合にはその横に >MASTER< と書かれてしまうのだ

「コレって確かギルドのマスターって事ですよ？でそたら絶対に格上の方かと思ってます」

「なるほど、ならしかたがないな。ムーチョン、頑張れよ？」

そう言っただけは、その場を離れていこうとする
しかしそれを見てムーチョンはマークの肩を掴んだ

「何だよ、俺は低レベルのキャラクター。お前は高レベルのギルドマスター、どっちがこの場に相応しいかと聞かれれば誰が見ても一目瞭然。しかも相手はお前をご指名ときている、これで俺が説明をしたら俺は変な目で見られてしまうことが必然だ」

「それでも……頼む、私は接近戦用のクエストには詳しくないの……」

「ぶむ……100k」

「ちょっとまって！？それはボツタクリよ！30kでどっ？」

「話にならないな」

「ちょ！ちょっとまってよ！知り合いは今のところ出払ってるから教えてくれる人がいないのよ！40k！これでギリ！」

「しょうがない、俺も流石に心が痛む」

「良かったー、ありがとう！」

「70k」

「おい！心が痛むんじゃないの!？」

「30kもマイナスしてやったんだ、かなり割安だと思うんだがどう思う?？」

「あんた私の収入をなんだと思ってるの!？服飾よ!？」

「それと50人以上の男性キャラクターからの貢物な」

「ギクッ」

「全く、少しくらいは装備してやれよ。この前なんか一回も装備する事もなく露天に売りに出してただろう?お前あいつらが知ったら泣くぞ?リアルで」

「ちょ、ちょー！それを今ここで話す!?!シエラちゃん聞いてるよ

!??どうやってフォローすんの!??」

「知るか、さつさと報酬を用意しろよ。しょうがないから50kにまけておいてやるから」

「ここまで私を貶めておいてまだ届かない!??分かったわよ!払います!払えば良いんでしょ!??この女たらしの馬鹿男!ネットゲーでナンパばかりしていると佳奈ちゃん泣いちゃうんだから!」

「ちょ!お前!俺はそんなことしてねえ!というカリアルの彼女の事をここにもつてくるんじゃねえよ!」

「へへーんだ!ここでの事ならアンタより私の言葉のほうが信用されるのよ!なんていったってそんな事が日常茶飯事で起きてるんですからねー!」

「ここらにいるのは大体がネカマだって言ってたじゃねえか!」

「あら!??今まさかネカマを馬鹿にしたのかしら!??だったらちよつと表に出ないさいよ!今から3時間後に近くのセブンイレブンに行つてそこで拳で語り合おうじゃないの!」

「ああいいだろうよ!ゲームじゃかてねえけど現実だったら俺に分があることを忘れたとは言わせねえぞ!今更止めたは無いからな!」

「あ……今日ちょっと調子が悪いからまた今度にしましょう?」

「本当に忘れてたのかよ」

グダグダになってきたところで二人の会話は終了となった
しかしそんな事をしていても問題と言うのは片付くはずも無く、二人がずっと漫才を繰り広げている間も男はそこに留まってそれが終わるのを待っているのだった

「コホン、では話も纏まったところで自己紹介をお願いできるかしら？こちらとしてもこういう事は丁寧かつ迅速に終わらせようと思うので。私はムーチョンよ」

丁寧な言葉を使って言っているが要約すると「さつさとやるうぜ？こんな面倒な事はさつさとおわらせるにかぎる」と言っているのだ
「もう少しちゃんとしやがれ馬鹿、そういう言葉を使うからマナーがなくなって言われるんだよ。マークだ、魔術師をやってる。
今回は何故か俺が教えていく事になったが気にするな」

「えっとシエラです！接近戦用キャラクターです！よろしくお願ひします！」

「あ、はい！キサメです！よろしくお願ひします！」

ムーチョンの台詞のせいでなんだか嫌なムードになっていたがマークやシエラのお陰でなんとか持ち直すことができたキサメは元氣良く挨拶をした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9735m/>

ネットゲーだらけ！

2010年11月23日11時38分発行